

復員後の経歴

昭和二十四年十月三十日 舞鶴上陸復員
昭和二十四年十一月十四日 愛知県丹羽郡千秋
町役場入職

昭和三十年一宮市と合併

昭和五十四年四月一日 一宮市役所退職

昭和五十八年四月二十日 一宮市市議会議員当

選五期二十年間

平成七年五月十三日 一宮市市議会議長就任一
カ年

平成七年五月二十五日 天皇陛下園遊会招待

平成八年四月十日 橋本総理大臣観桜会招待

平成十年十一月四日 宮田用水土地改良区理事
長

平成十六年八月二十三日 濃尾用水協議会会長

平成十七年四月二十七日 旭日双光章受章

(愛知県 河村 廣康)

全員元気で日本へ帰ろう

愛知県 岡田 康孝

二十一歳で現役入隊

現役二十一歳で豊橋の部隊に入隊。

四カ月あまり、恵那山の山麓で初年兵教育を受けて、昭和十六（一九四一）年八月、現在の武漢、昔の漢口の北方六十キロメートルの片田舎で駐屯しておりました。なんにもない田舎ですが皆さんご承知のとおり、長沙作戦がありました。第一次、第二次長沙作戦です。その当時の新聞を眺めてみると、「城壁で日章旗を振って堂々と入城」こういう報道がされていきました。しかし、生還したものは半数であります。散々な目に遭って敗退して帰ってきております。これが現実であります。当然、長沙、桂林は、私にとって痛恨の地であります。

大腿部に銃弾

十七年の六月六日、上海の南方の折江省で敵の銃弾に当たって大腿部を負傷しております。だいたい戦争というのは、我々は歩兵でしたから毎日重たい荷物や鉄砲を担ぎ、毎日八里、三十二キロメートルの行軍は普通であります。炎天下で歩いていきますと、もう苦痛でたまりません。そういうときに、鉄砲の弾がひゅんひゅん通りますとほつとほつとする。というのは頭上高く弾が飛んでいるから身に危険はありません。なぜほつとするか、部隊が停止して休めるんですね。斥候が出て敵情視察をして、よしと確認できるまで休めるんです。ところが、きつくなつてまいりますと、第一に思うのは片輪にならないところに弾が当たらないかなです。さらに高じてまいります片輪になつてもよい、こんな心境になります。さらにきつくなつてくると、もうどこでも弾が当たれという心境、やけっぱちであります。これが本当の人間の心境ではないかと思えます。一番怖いのは弾がひゅんひゅんときてくるときではなく、身辺にきたときは

ブスン、パチンという音がします。というのは、岩にあたる時はパチン、土に当たるとブスンです。身近にきて伏せた瞬間に足をやられました。当然私に弾が当たったときもブスンパチンでした。そして、近くにいた兵隊が衛生隊に通報してくれました。そこで、「おうい、岡田がやられた」と通報が中尉にきました。みんなどう言つたと思いますか。かわいそうだというものは一人もいません。「やつ、うまいことをやつたな」と言うんです。足ですから、歩かなくていいですから。それぐらい戦争は過酷であります。また、多くの戦友が亡くなつております。

十七年六月に負傷して二カ月後、洞庭湖の近くでリハビリをやり退院、十七年八月に満州に転進しました。昭和十八年十月に、人事係から呼び出しを受けました。「お前悪いけど憲兵隊に行つてくれないか」「いやです」「何でいやだ」「私は中隊が好きだから行きたくありません」「どうしたらいいいんだ」「命令ならば行きます」「命令だ」「は

い、行きます」これが人生のまた、生き別れであります。というのは、二カ月後に、我々の部隊は南方に移駐、二日サイパンに向かう途中でアメリカの魚雷のために沈没しました。人生の分かれ目はわからないですね。私そのまま中隊に残っていたら太平洋の藻屑になっていたでしょう。戦争は悲惨です。戦争大反対です。

シベリア大学留学

終戦後、成績がよかったのでシベリア大学に留学いたしました。衣食住付きですよ。重労働も付いていました。皆さんは抑留といいますが、四年二カ月おりました。行ったところは、バイカル湖南のイルクーツク、シベリアの三大都市ですね。イルクーツク、ハバロフスク、チタが三大都市であります。しかし、私が行った当時は名ばかりで非常に惨めな都会でありました。というのは、ソビエト連邦時代には、シベリアは犯罪者の抑留地であります。過酷なところであります。当然冬は寒うございます。零下六〇度であります。零下六

〇度といえますと、寒いではないんです。痛いんです。体は防寒具で覆っていますから全然寒くありません。ところが、防寒帽をかぶって面だけ出していると、吐いた息が全部ツララになる。一瞬で鼻毛まで凍ります。そして、作業をしているとみんな顔を見る。どうしてか、鼻の頭から凍傷になつていく。白くなつていくんです。そしてこするとかさぶたになるんです。そういうところで重労働の作業をしていたんです。

食糧事情といえますと、飯盒のふた八分目のスープ、小豆が五〜六粒入った朝食です。一気飲みです。お昼は二五〇グラムの黒パン一片であります。それは携行してお昼にいただきます。飲み物は本当に水だけあります。夜は飯盒の底に大さじ五〜六杯の燕麦のおかゆであります。燕麦は馬が食べるものだと思つていたんですが、人間様が食べている。寒いところの燕麦は結構食べられるんです。しかし、大さじ五〜六杯ですからね。入ソしたときはみんな時計、万年筆、衣服などを持

っていました。よって大都市ですから地方人との接触がすぐできます。民家に飛び込み、パンに代えて飢えをしのぎましたが限度があります。

その後、口に入るものは草からすべて食べました。ときには、ヘビ、トカゲ、交通事故にあった犬、こういうものすらも口にいたしました。そして、現場へ行きますと公衆のゴミ箱があります。解散するとすぐゴミ箱に走ります。なぜ走るか、芽のふいたジャガイモが捨ててある。皆さんご存知の通り、芽のふいたジャガイモはえぐいから頭が痛くなりますね。それすらもあえていただく。だんだんと利口になり、それを蒸かしてつぶし、焼いて食べるとえぐさが取れるんです。

日本に帰る大戦略

一年半ぐらいたってから周囲を眺めてみると、もう栄養失調寸前でやせこけて顔色も黒い。そこで有志と相談いたしました。一大目標を立てました。「全員元気に日本に帰る」という大戦略を立てました。究極的には一度徹底的に仕事をやってみる。

それを一カ月リミットにして、一カ月たって食糧事情が好転しなかったら半ストをしようという決議をしました。幹部を集めて「明日から徹底的に仕事をする。それを一カ月我慢してやってほしい」こういう戦略戦術を徹底いたしました。体の弱い人を助け、スペシャリストである大工、左官、鉄工、こういう人たちを適材適所に配置して、徹底的に仕事をする。ゴミ箱に走る者はありません。その結果、幸いなことに二十日間ぐらいたって食糧事情が好転いたしました。朝、昼は変わりましたが、夜が飯盒八分目のおかゆになりました。十分満ちたり、当然みんな力がついてきます。元気になって仕事もバリバリやります。ということは、「働かざる者食うべからず」の結末があります。ノルマがあつたんですね。それまでは、自分だけは日本に帰りたい、その思いは誰も一緒であります。どういう行動をするかというと、サボタージュをする。自分のエネルギーを使わないようにする。さらに、監督の目を逃れてあちこち逃げ回る。

しかし、力を合わせてやったおかげで、ノルマを十分達成することができたのでしょう。食糧でまかなわれました。いずれにしても、我々は、本当に自分だけは元気で帰りたいという思いの中から、力を合わせて食糧事情がよくなってみんなが感動しました。

最後に、従事した建築は長さ八十メートル、幅十四メートルの将官の官舎であります。中央が四階、両横三階の大きな建物をレンガ積みで建てました。途中から監督の信頼を得たのでしよう。全面委託されました。図面を渡されていつまでに立ち上げてくれ。当然我々も仕事がしやすくなります。ノルマもどんどん上がります。そして三年ぐらいで完成の目前に至りました。当然、「これができるたら俺たちは帰れるぞ」帰国のめどが立ちました。

ところが、帰れる寸前に、私は秘密警察の本部に呼び出しを受けました。というのは、憲兵隊にいたことで取調べを受けました。それも狭い部屋

で当然質問があります。いやなことは答えようとしないでいると机をたたき、「なに考えているんだ、即答せよ」というような調子で半日取調べを受けました。

その結果、帰国を目前にしてハバロフスクへ転送されました。そこは特殊収容所でした。しかし我々の部隊は三年で帰りました。千五百人の部隊でしたけれども三年間でなくなったのはたったの七人です。こんな収容所は皆無です。多くの収容所で七万〜八万の人が亡くなっています。それぐらい過酷なところです。本当に生き地獄です。

しかし、私は四年二カ月。あえてシベリア大学と申し上げたのは、私の人生にとって最高の勉強の場でした。苦労は金を出してでも買えと言われざるぐらいです。無償で生活ができ、ロシア語も覚ええました。教訓の一つ目は、命の尊厳、命の大切さです。二つ目は、健康で働ける喜び、三つ目は、何事にもめげないで耐えることと、ものを大

一切にすることです。まして、もっと大切なのは一人では生きられない。「俺が」というのは愚の骨頂である。やはり、みんなが力を合わせることによって、あの地にうずもれることなく元気に帰ってこられたのは皆さん方の力であります。やはり共生であります。力を合わせることはいかに大切か、これは現代の社会でも言われることです。これらのことを体験したことで現在の私があると思います。私は嘆くどころかあえてよかったと感謝しております。今の現在自分があるのは皆さんのお陰、経験が生きているんだなとそんな思いです。

芋泥棒

昭和二十一年八月部下十人と共に、バイカル湖より流れ出る唯一の川、アンガラ川のほとりで切り出された材木を筏に組む作業に従事していた。

現地の作業方法は、陸上で筏を組み川に流すものであった。重い丸太を操作するのに悪戦苦闘、ノルマは上らず頭を抱えるしまつ、そこで、皆で協議し知恵を絞った結果、陸上での結束を止め、

浮力を利用して川の中で作業することに決定した。おかげで材木の操作も容易にできて、作業能率もアップ上々の結果を得ることができた。

その夜、我々は食べられるものはないか付近を捜したところ、じゃが芋掘りに及んだ。掘り方はそれと分からないように。芋を引き抜くだけでなく、芋だけ切り取り、あと土を被せて跡を残さないよう細工をし、麻袋いっぱい収穫した。その夜は全員で「じゃが芋パーティー」久しぶりに腹いっぱい大満足であった。翌日は他の五人が、昨夜と同じ手口で麻袋二袋の収穫、早速収容所に残っている仲間のために穴を掘ってじゃが芋を隠した。

翌朝、作業していると、警備兵が宿舎(テント)へ戻るように通達に来た、何事かと行って見ると、四、五人の農民が大変な剣幕でどなっていた。その中の一人が私に「お前達がじゃが芋畑を荒らし、泥棒したのだ」と決め付けた。

私は「知らぬ存ぜず」と白を切ったが、現地へ連れて行かれて愕然とした。その現場は何んたる

事か、じゃが芋は全部引き抜かれており一目瞭然芋泥棒の仕業である。農民が憤慨するのも当然である。弁明の余地は全くない、ただ頭を抱えるのみであった。

解決策として、全員集合させ、事情を説明し「今から制裁として、全員、俺が殴るから我慢してほしい」とお願いした。全員を一列に並べ、右端の一人の胸ぐらを掴み拳を振り上げたとき、農民が飛んで来て私の手を掴み、「暴力はいかん、その代わり人民裁判にかける」と言う。それではなおさら大変な事になってしまふ。そこで苦肉の策として、農民をテント内に入ってもらいまず陳謝をする。その代償として我々の十日の食料の肉カルバツサー（肉の加工品）に静岡のお茶を添えることで許してほしいと願ひ出た。農民もしぶしぶ了承してくれて一件落着、全く冷汗ものであった。

保管したじゃが芋は、無事収容所に持ち帰り多くの仲間に大変喜んでもらえた。その後他の収容所で芋泥棒に行き、農民に射殺されたことを聞き、

いまさら無事に胸をなで下ろした。

粹な友情

筏組み作業を終えた夜、親しい警備兵が私をパーティーに参加させるため、彼の軍服を取り替えてくれて、村の集会場に行った。（彼はウズベックスタン人で、顔も体型も日本人そっくりであった）集会場では村の青年男女が集い、楽器を奏で楽しいダンスパーティーであった。私も彼らと一緒にダンスを十分愉しむことができた。全く人種差別も偏見もなく、一人間として対等な対応してくれて感謝のほかはない。

将官夫人の思いやり

ゼネラル官舎建設で、深さ八メートル、直径八メートルのマンホールの構築中、私の不注意で中指の爪をはがす事故に遭ってしまった。一カ月の休養の後現場に戻った。その時、日ごろ顔を見れば挨拶をしていた将官夫人に呼び止められ

「しばらく顔を見なかったが、どうしていたのか」と尋ねられた。

休んだ理由を説明すると、体大切にしなさいと、親切に私の体をかばってくれた。別れ際に、二キロの黒パンを半分切り「お腹が空いただろう」と手渡してくれた。その厚情に感謝感謝であった。

現場監督のアドバイス

昭和二十三年八月、エヌカベデイの取り調べがあった。その後、私がハバロフスクの特殊収容所に送還される噂が出た。

ある日、現場監督から誰もいない所に呼び出された。

「お前は日本のエヌカベデイだ。だからハバロフスクに送られるが、取り調べには全て知らぬ、存ぜずで通せ」とアドバイスをしてくれた。その親切に胸に熱いものが込み上げた。

心のふれあい

前述の夫人にお別れの挨拶に行った。夫人は大きな手で私の手をしっかり握り締め

「お前には日本のご両親が、首を長くして待っていることだろう。ハバロフスクに行っても体に

は十分気を付けて、元気に日本に帰ってほしい」と熱っぽく私を案じてくれた。そして、また黒パンを半分切ってくれた。人間味溢れた対応は終生忘れることはできない。

【執筆者の紹介】

出生等 大正九年一月十六日 岡崎市竜美丘北

で出生

学歴 名古屋市立第三商業学校

職歴 昭和十二年四月 南満州鉄道株式会社

入社

軍歴 昭和十六年四月 豊橋歩兵十八連隊入

隊

昭和十六年八月 中支派遣

昭和十七年八月 南満州に転進

昭和十八年九月 鞍山憲兵隊に補助憲

兵として転属

昭和二十年八月 終戦、公主嶺にて武

装解除

最終階級

伍長

職歴

昭和二十六年二月 兄弟にて、ブラザー印刷社創立

昭和二十九年 プラザー印刷株式会社設立 現在に至る

平成二（一九九〇）年 社長退職会長に就任

平成四年 愛知県教育振興会の派遣講師

平成十五年 愛知県教育振興会講師退任

平成十八年 岡崎市教育文化賞を受ける

その他

平成十九年 愛知県教育委員会生涯学習講師辞任

（愛知県 河村 廣康）

シベリア抑留記

愛知県 斉藤 弘

私は思えば、昭和二十（一九四五）年三月現役兵として小田原駅に集合。列車に乗車後大阪で下車。ここで軍服の支給を受け、兵隊姿となりました。その後、列車に乗り博多駅まで行き、ここで乗船したがどこに向うのか分からなかった。

船が着いたのは朝鮮の釜山港だった。そこでまた、汽車に乗りました。列車は北へ北へとどんどん走りました。そして着いた所は孫呉^{ソンゴ}の部隊でした。ここで通信兵としての教育を受けました。教育が終了して、昭和二十年八月九日黒河^{コッパ}の通信所の交代要員として派遣されることになっていましたが、日ソ戦争が始まり、攻撃をうけて、本隊は北安に後退しました。しかし私たちの中隊は終戦までソ連軍と戦闘を続けておりました。

停戦命令がきて、武装解除され、ソ連兵の銃剣